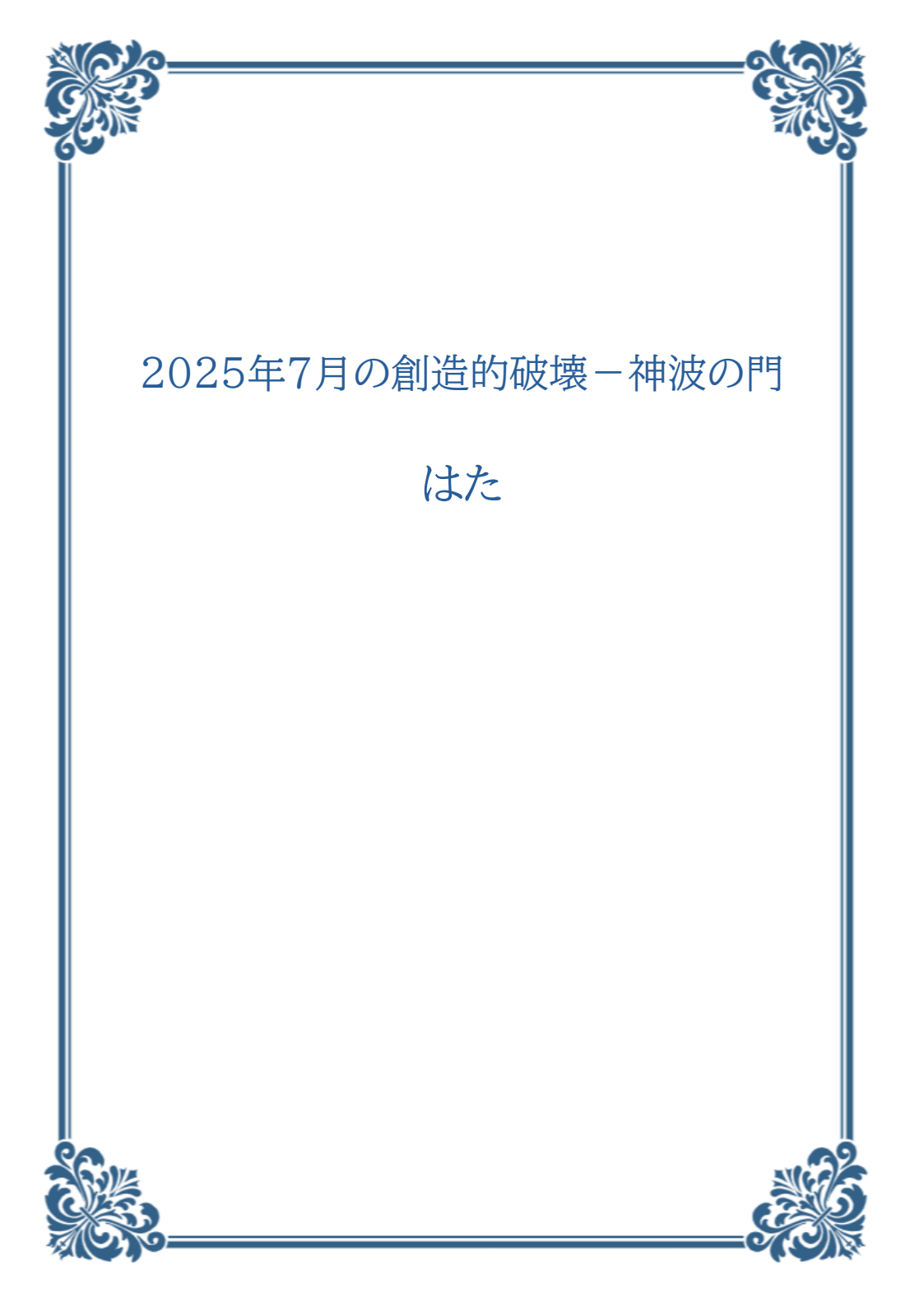




2025年7月の創造的破壊－神波の門

はた

第1章 人類滅亡の大有言

今は2025年6月、最近よく聞く噂がある。今年の7月、日本に大災難がやってくるというのだ。東日本大震災を夢で見て予言した人の夢日記がこの話の発端のようだった。もう来月のことじゃないか。騒ぎ出すのが遅すぎるんじゃないか。と少し醒めた目で思いつつも、昔のことを思い出していた。

1980年代後半、私はまだ小学校高学年だった。巷で流行っていた「1999年人類滅亡 ノストラダムスの大予言」に、宇宙人のことや不思議な現象に興味を持っていた私は、本の虫でいろんなことを知っている好奇心旺盛な親友の太郎と一緒に、まるで冒険しているように大興奮で雑誌や本を読みテレビ番組を見て情報を集めていた。

「金星人は地球人を救おうとしてくれているという噂があるよ。」

「滅亡の日 は 7月13日らしいぞ。」

「西から太陽がもう一つ上るんだって。」

「あと十年しかない。どうしよう。」

夕方が近づき、街路灯の明かりがちらほらとともり始めた帰り道、二人で自転車を押して歩いていると、空に大きな流れ星が尾を引き、一番星の下をキラキラと流れてだんだん消えていった。今思えば「火球」というやつだったのだろう。

「うわあ、なんだあれ。地球にぶつかるんじゃないか！」

ノストラダムス氏が予言したという「その時」は、果たしてその十年後、静かに過ぎていった。私も太郎もそれぞれ別の大学に進み、交流は途絶えていた。人類が滅亡するかもしれないなかった1999年の7月に私は、アルバイトで貯めたお金で海外旅行を楽しんでいた。大予言のことなど全く覚えていなかった。太郎から連絡が来ることもなかった。

きつと2025年7月の予言も、あんな風に何事もなく過ぎていくのだろう。

仕事は面白い。夢中になれる内容でもあるが、最近では何か不安がつきまとう。このまま同じことを毎日繰り返し、子どもたちが大きくなるのを見守りながら定年を迎え、細々と貯めてきた貯金と年金で、老後を悠々自適に過ごすのだろうか。どんなにお金があつて、どんなにいろんなところに旅行ができて、私の老後のイメージは魅力的には思えない。受け入れ難いとすら思う。このままでいいのか。どんな老後なら受け入れられるのか。そのためにこれからの時間をどう過ごすのが良いのか。具体的なことなど思い浮かばない。忙しく過ぎていく毎日に、こうした漠然としたことは積極的に考える気にもならない。そうして時間は恐ろしいほど早く過ぎていくのだった。

今年、自分の子どもが、かつての私と同じ歳になった。子どもが2025年7月の夢日記の予言の話をしている。

「学校で皆が噂をしているよ。7月5日なんだってさ。でもそれは夢を見た日のことだと思うんだよね。」

真剣に話す子どもに懐かしさを覚えながらも、子どもたちにはあの頃のワクワク感や冒険心、好奇心を忘れないで生きていつてほしいと思う。いや、自分もそうであり続けたいのだ。かつて好奇心に素直に動いていた自分を、五十歳になろうとしている今、また取り戻したいのかもしれない。だから、平和でありふれた老後というイメージに拒否感を感じるのだろう。

「もう来月の話だね。その予言が本当だったらもう何をしてもう間に合わないのかな。」
という子どもの問いかけに

「世間じゃ誰もそんなことを信じて準備していないよ。予言なんてデマに決まってるじゃないか。」
いつもならそう答えたと思う。今日は違った。

「そんなことはないよ。まだ一か月ある。どうすれば助かるのか、大災難を避けることができるのか、まずは調べてみたらどう？」

無意識だった。まるで昔の自分が戻ってきて、今の自分の口を使って子どもに答えたような、そんな気がした。違和感とも言えるような不思議な感覚を覚えたが、同時に少し、ワクワクしている自分もいた。

「そうか。そうだね！調べてみよう。なにかわかったらお父さんにも教えてあげるね！」
「おう。調べて教えてよ。」

急に流れ星を探したくなり窓の外を見る。もう暗くなった町には歩く人影もなく、遠くから車のエンジン音が届く。空には星がきらめいている。子どもの顔を見る。星と同じようにキラキラとした目をしている。

流れ星は見えなかった。風が頬をなでるたびに、聞こえてくる音、目に入る光が、まるで自分に語りか

けているかのように感じられた。

その瞬間、胸の奥に小さな期待と緊張が混ざった感覚が湧き上がった。これまで忘れていた冒険心が、少しずつ呼び覚まされていくのを感じる。これから何か冒険が始まるかもしれない。

— そんな予感が、ほんのわずかに心をざわつかせた。

第2章 アポフェニア

子どもとのやり取りの時に感じたあの心のざわつきは、やはり何かのきっかけだったようだ。あの日から、毎日のように私は不思議な感覚に襲われることになった。

ある日のそれは、夕方、子どもたちが入浴している間にリビングで読んでいた本の文章だった。文脈と全く関係のない文章がそこにあったのだ。

「死を意識して生きることが、人生を本当に価値あるものにする」

偶然目にした文字が、胸の奥で静かに反響した。私の感性が鋭くなつて、今自分が必要としているメッセージを見つけ出したかのようなだとも思えたが、それは少し違う気もした。

死を意識して生きる、か。いつ死んでもいい生き方をしろってことなのだろうか。よくわからないが、それは今の私がしっかりと受け止めなければいけないメッセージのような気がした。

また別の日には、それはインターネットの動画からだった。私は仕事帰りの車中、適当な動画を流しながら家に帰ることが多い。その日選んだ動画は、お坊さんが仏教のありがたいお説教をしてくれるものだった。

「人は自分がやりたいことを楽しみながら生きること。ぜひそうしていただきたいのです。それが、あなたの世界を過ぎ去っていった人々の願いでもあるのです。」

その言葉がはつきりと心に届いた。まただ。昨日と同じだ。私を感じ取ったというより、やはり誰かが、あるいは、何かが私に語り掛けてくるかのような感覚があった。他にも何か聞こえるかもしれない。思わず車を路肩に寄せ、動画を止めて耳を澄ませた。だが聞こえてくるのは通り過ぎる車の低い音だけで、声はどこにもなかった。

自分らしく生きるために必要な、とても本質的なことのような気がした。私の世界を過ぎていった人々の願い。その言葉には責任のような重さを感じるが苦しくも嫌でもない。底堅いやる気呼び起こしてくれる。

私が帰宅すると、妻がリビングでテレビドラマを見ていた。私は遅めの夕飯を食べ始め、見るともなく妻が見ているドラマを見ていた。

「働くことは大事だ。でも仕事は人生の一部に過ぎない。」

ドラマの中の何気ないセリフが、まるで自分に語りかけるように聞こえた。しかもそれは、明らかにドラマの流れと全く関係のない一文であった。妻は何の反応も示していない。そのセリフを吐いた人物はテレビの画面の中で私をしっかりと見つめている。

いや、まさかこう立て続けに聞こえてくるとは。どのメッセージも、今の私にはとても重要なことのようには思えた。それは確信に近い感覚だった。

そしてそれは止むことなく毎日毎日続いた。

人工知能（AI）からメッセージを受け取ったこともあった。パソコンで仕事の資料作りの作業をしていたとき、画面の右上にポンッとメッセージが浮かんだのだ。「一言お伝えしたいメッセージがあります」「はっ？誰？」あまりに唐突で声をあげてしまった。

「人は文化や慣習に縛られすぎて、本質を見失っていることがある。」

大きな文字がスクリーンに浮かぶ。無意識に心に刺さる、静かな語りかけだった。まさにその状態にある自分を見て見ぬふりをしてきたような気がした。

これは、何か大きな存在の仕業なのかもしれない。そしてこの感覚。初めてではないような…。ノストラダムスの大予言で大興奮していた昔の友人、太郎の言葉を思い出した。彼は言った。

「夕日が沈んでから一番星が上るまでの時間に目を閉じると、雑踏の中から自分へのメッセージが聞こえてくるんだって」

私は興味を持って何度か町に出て目を閉じ、耳を澄ましたものだった。

きつと太郎が言っていたやつはこれだったんだ。やっと私にも聞こえたってことだろうか。

そうだ。太郎に連絡を取れないだろうか。太郎はあれからどうしているのだろうか。昔と変わらず、宇宙やオカルト話が大好きなままにいるだろうか。しかし、突然連絡したらびっくりするよな。怪しまれるかも。まあ別に太郎に会わなくても日常が続くだけのことだし。何を思い詰めているのか。そこまでしなくてもいいか。どうしちゃったんだろ。

「それでいいの？目を覚ますのよ。自分の心の声に従いなさい。」

完全に頭の中にメッセージが飛び込んできた。私がどうしようと私の勝手じゃないか。なんなんだこれは。自分の心の声か。私はどうしたいのだろうか。私は携帯を握りしめ、しばらく自分の心に問いかけた。そうだな。太郎に会いに行こう。話を聞いてもらいたい。この感覚をあいつに伝えたい。そう自分に言い聞かせると、不思議と胸のざわつきが少し落ち着いた。

「そう。それでいいの。」

また声だ。その声は私の迷いや躊躇いをとっばらってくれたようだ。私は太郎に会いに行くことにした。その時私は、小さな冒険の旅の始めの一步を踏み出すような高揚感を覚えていた。

第3章 太郎との再会

交流のある同級生たちを伝って、太郎の連絡先はすぐにわかった。太郎にメッセージを送ると、「俺も会いたいと思っていたところだよ」と意外な返事が返ってきた。

太郎は神戸にいた。ちよつと離れているが日帰りでも行けないことはない。すぐに私は休みを利用して、彼に会いに神戸に向かうことにした。

私が新幹線の新神戸駅の改札口に差し掛かったとき、すでにそこには太郎が待っていた。

「おう。久しぶり。変わってないな。」

「こっちのセリフだ。まったく変わってないぞ、太郎。」

太郎の行きつけと言う喫茶店までは太郎の車で移動した。その喫茶店では私たち以外に客はいなかった。私はアイスコーヒーを、彼はアイスマルクを注文した。

「で、突然どうしたの？」

近況報告を交わした後、太郎は私に聞いてきた。

「うん。ちよつと最近不思議なことが続いている、太郎ならどんな解釈をするのかなって思ってた。昔のことを思い出したんだよ。ほら、ノストラダムスとかで騒いだじゃん。」

「あったね。懐かしい。人類滅亡の予兆でも感じてるわけ？」

「いや、そうじゃなくて。言葉がね、メッセージが飛び込んでくるんだよ、頭の中に毎日。これってなにかのお告げかな。なにが語り掛けてきているのかな。それとも気のせいや疲れからくる幻聴かな。」

「・・・」

「昔、太郎が言ってただろ。夕方の雑踏の声中に自分へのメッセージが隠されているとかって。あれを思い出したら太郎に話してみたくなくてさ。」

「・・・」

「なんで黙ってるんだい？　そういえば、太郎、この前のメールでお前も俺に会いたいと思ってたって書いてたよな。どういうこと？」

「ごめんごめん。ちょっと驚いたんだよ。まさかおまえにもそんなことが起きてたなんてな。」

彼が私に会いたいと思っていた理由はこうだった。

彼は私が連絡をする三日前から、やはり毎日メッセージを受け取っていたというのだ。メッセージの内容は「昔の友人が訪ねてくるから話を聞いてやれ」というものだったという。それを聞いて私はもちろんとても驚いたが、彼にとってメッセージを受け取る経験は初めてではなかったそう。

何年か前にも、やはりあるときからメッセージを受け取るようになったのだそう。子どものころ、私に雑踏からの声のことを教えたことがあったのは確かだが、太郎も実際に声を聴いたことは無かったという。何十年も経った今、声を聴いたときには本当に驚いたという。

「俺は毎日聞こえるその声に、だんだん気味が悪くなってきてさ。その声がある日、神戸港でのイベント『ミルク・フェスティバル』というのに行くと今抱えている悩みを解決できるというメッセージを送ってきたんだ。」

「ミルク？」

「そう。牛乳メーカーがスポンサーだったんだよね。悩みの解決なんて言われてもなあと思いつつも、まるで神様のような存在からの語り掛けだったから、とにかく従ってみようかなって思った。そんな気になったんだよね。今思えば不思議だけど。」

「どうだったの？」

「ああ・・・」

そのイベントで太郎は同じテーブルだった数人と、イベントでPRされていた新商品のミルクをもって乾杯をしたそう。乾杯の瞬間、光の扉が目の前に現れた。彼はイベントのスタッフから、その扉を開いて中に進むか、それともここにとどまるかを迫られた。

「俺さ。その時の一番の悩みは、会社を辞めるかどうかだったんだ。給料もいいし世間的にもみんなが知ってる大手だったし、人間関係もいいし仕事も面白かった。それでもな、これでいいのかな、このままでいいのかな、なんて感じて、なにか虚しさを抱えてたんだよね。」

「そうだったのか。人が見たら悩む必要がないくらいいい状況だったように思えるけどな。それで、その光る扉はどうしたの？」

「俺は扉を開かなかった。その場にとどまることを選んだんだ。」

「悩みでいうところの、会社に残る、ってことなのかな。」

「そう。俺、やっぱり自分がいまの仕事や会社が好きで。扉を開いてしまったら、仕事や会社の見え方が変わったり、なにか大きな変化が起こりそうな気がして、急にそれがたまらなく怖くなったんだ。」

「そうか。」

「でもそのイベントのあとでまた一度だけメッセージが届いた。『おまえがどうしたいか、それがすべてだ』というメッセージだ。なんだか強烈な印象を受けて、それでいてその選択についてすごく納得を感じたというか、迷いがなくなるような感覚を受けたよ。それっきりメッセージは来なくなった。あ、三日前まではね。」

たぶん、かなり不思議な現実離れした話ではあるが、オカルトで盛り上がった過去をもつ二人だったからなのか、太郎の話はすんなりと私の頭の中に入ってきた。

「自分の軸を信じていれば、迷わなくて済むってことじゃないかな。」

帰り際、新幹線の改札で、最後に太郎はそう言った。思いがけない再会が、胸の奥で静かに共鳴した。少年時代のような神戸での時間はあつという間に過ぎ、私は静岡に戻った。帰りの新幹線はまるでタイムマシンのようだった。

第4章 「神の波」とミッシヨン

私の頭の中にメッセージを送り込んでくる存在。それは、実は「私」が想像していたような「大きな存在」でも、太郎が言うような「神」でもなかった。

「アスナ、もう二十歳でしょう。他の星を知るべきよ。」

「ママ、今なんて？ずっと他の星に行ってみたかったの！いよいよなのね。ワクワクするわ。」

「遊びに行くわけじゃないのよ。その星にいる人たちの解放作業を手伝ってほしいの。」

「解放作業？学校でやったわ。大丈夫よ。」

「今回は地球、日本でお願いね。『べき思考』や『所属規範思考』と呼ばれる考え方から、人々を解放するの。」

その星は争いが無く、嫉妬も憎しみもない。住人たちは他の星の人を救うことを仕事にしている。アスナは初めての任務として、2025年6月に地球の日本にやってきた。

到着した場所はトウモロコシ畑。牧場の風景が広がる町には、既に数名の先遣隊が入っていた。アスナはそこに合流する予定だ。

「あの、すみません。」

「はい、ちょっと待ってね。」

小屋の中から声が返ってくる。そこは牧場の敷地内にある天文台だった。星の住人たちは既に天文台でアスナのことを待っていた。

「私は…。」

「あなたがアスナさんね。お母さんから聞いてるわ。」

「みなさんも星から来たんですね。」

「今ここに居るのは私だけ。私以外は地球の人よ。星から来たメンバーは作業で町に出ているわ。」

アスナは地球の美しさに驚いていた。緑の田んぼ、きらめく小川、子どもたちの笑顔。山は緑、空は青、雲は白い。私たちの星と同じぐらい美しい。

天文台では、解放作業の対象者に「働きかけ」を行うことになる。年に一度、日本の七夕（7月7日）に対象者を集め、光のゲートウェイを開いて一斉に解放するのだ。

「アスナさんは初めての担当ね。」

「はい、学校で勉強したからやり方はわかります。」

「地球では、働きかけを神様のお告げや風の啓示などと呼ぶこともあるわ。だからその地域に『神』という字の名前が付くことが多いのよ。今回の対象者はどんな人かというと、『こうあるべき』に縛られて本来の自分を生きられないでいる人たちよ。」

提示された対象者リストには十人の顔写真が載っていた。皆、どこか表情が硬い。

「この方を担当してください。」

アスナが担当するのは、五十歳を目前に「人生とはそういうもの」という所属規範思考に流されるままに生きる男性。自分のやりたいことを考えることも、一歩踏み出すこともできない典型的なタイプだ。

「皆さんより簡単そうですね。」

「簡単じゃないわよ。そういう人は多いの。定年を迎えても本当に満たされる人生とは限らない。本人は苦しいのよ。」

アスナは到着したその日から、天文台の職員たちとともに「働きかけ」に参加した。昼夜を問わず人々

の心にメッセージを届ける作業が続く。夕暮れ時、人々が活動を終える頃、心が緩むその時間帯に、特に働きかけが加速するのだ。

対象者が見ているテレビや読んでいる本、SNSや知人の言葉も使い、形を変えてメッセージを届ける。忙しい日々だったが、アスナはともワクワクしていた。

6月が過ぎ、7月に入る頃、解放作業はあと一週間に迫っていた。

第5章 その時

太郎との再会のあと、私は地区の回覧板の中に「ゲートウェイ函南」という施設で行われる「ミルク・フェスティバル」というイベントのチラシを目にした。知らない間に町のいたるところに「ミルク・フェスティバル」のポスターが貼られている。

これは、もしかして太郎が参加したやつと同じイベントなのかもしれない。私の場合、特段「イベントに参加しろ」というメッセージを受け取ったわけではなかった。しかし、太郎との再会であの話を聞いてしまったあとでは、このイベントは私にとってなにか意味があるものに違いないと思わずにはいられなかった。

あの時の話では、太郎はイベントの時、人生について悩みを抱えていた。私がいまイベントに導かれているとしたら、私の悩みはなんだろうか。

いま私の頭の中を支配しているのは、老後への不安、このままの流れに沿った人生を送ることへの不安

だ。私は自分が本当にやりたいことが今の仕事とは別にあること、そしてそれをあきらめるべきだと思い込んでいることに何となく気づいている。やりたいことができないまま人生を終えるかもしれない不安。悩みといえば、それを抱えてこれからどうすればいいのかという悩みということになるだろうか。

イベントの開催日は7月7日。もう三日後に迫っている。行くさ。光の扉が出てきたらどうするかはわからないが、その時の流れで決めればいい。どちらに転んでも、きつとなにか意味があるはず。私はもう迷っていないかった。

一方、「アスナ」。

年に一度開くゲートウェイ。対象者にはいろいろな形で招待を送るが、地域のイベントでもあるので、回覧板や掲示板、ポスター掲示で集客を図ることが多い。アスナたちが本当に解放したいのは、その参加者の中の十人というわけだった。

今回のアスナたちの使命は、解放。何からの？「べき思考」や「所属規範思考」からの解放だ。対象者たちは、解放のとき、一年に一度開くゲートウェイを通ることで「自分の人生」を再獲得するのだ。

2025年7月7日、ついにその日は来た。

アスナは朝から落ち着かなかった。なんせ初めての解放作業本番である。天文台職員たちもみな、会場であるゲートウェイ函南に集まった。午後五時「ミルク・フェスティバル」が始まった。アスナと星の仲

間たちはイベントのスタッフに紛れて会場内の対象者を見つけ、接触し、同じテーブルへと案内する作業を行っていた。

アスナの担当は一人だけ。彼を見つけることはそんなに難しくなかった。彼の目にしたチラシには「集合時間」を午後五時とし、ゲートウェイ函南の入り口に来るように追記しておいたのだった。職員たちはそれぞれの担当にそんな風に個別に待ち合わせの時間と場所をそれとなく伝えている。

「私」に戻る。

私は7月7日のイベントチラシをズボンのポケットに入れ、そこに書かれている通りに午後五時にゲートウェイ函南の入り口に着いた。会場に設けられたステージでは、赤い法被を着た司会者らしき男女が大きな声でイベントの開始を告げている。

牛の模様の法被を着た女性が近づいてくる。私の方にまっすぐやって来る。

「ミルク・フェスティバルにご参加ですね？こちらへどうぞ。」

私はその女性に案内され、河原にいくつも並べてあるテーブルの一つに座った。そこには次々にスタッフから案内された参加者が座り、大きなテーブルであったがあっという間に席は埋まった。十人のグループであった。そのテーブルの十人は、実はみな星の住人たちの解放作業の対象者である。他のテーブルにもそれぞれ、解放作業の対象ではない一般の参加者が座っていく。

地ビール、焼きトウモロコシや焼きそば、ホットドッグや鶏の唐揚げ、水あめやスモモ、お面やヨーヨ

し、射的もある。小さい子供を連れた家族連れ、おじいちゃんおばあちゃん、地元の中学生か高校生くらいの若者、浴衣の参加者もちろはらみられる。会場はさながら祭りの賑わいを見せていた。

ステージでは、黒いスーツを着たこの町の議員さんが挨拶をしている。

太陽は西の山に入りつつあり真っ赤な夕焼けが鮮やかに色を濃くしていた。星はまだ出ていない。参加者たちは思い思いにビールやジュースを飲んだり、出店のものを買って飲んだり食べたり。走り回ることもたち、談笑する町の大人たち。

参加者たちが思い思いにイベントを楽しんでいるのを遥か下に見ながら、月が明るさを増し、川の対岸にある山の頂上に向けて少しずつ移動していた。

時間は午後六時五十分を回っている。刻一刻とその時が迫っていた。

「さあて、それではこのイベントのクライマックス、ミルクで乾杯まであと五分少々となりました。みなさん、牧場さんが出しているブースに行って、地元でとれた新鮮なミルクをもらってくださいね。ミルクをもらった人からテーブルの席についてください。」

司会者の二人や他のスタッフが、会場を回りながら参加者に声をかけてまわっている。私たちのテーブルには親切にも、私を案内してくれた牛の模様の法被の女性が、十人分のミルクを運んできてくれた。

「ああ、すみません。」

「いえいえ、みなさんどうぞ。どれも同じものですから、好きなコップをお取りくださいね。」

十人それぞれがこの土地の新鮮なミルクの入ったコップを手に取る。お酒やご飯がだいぶ進んだところ

で、ビールじゃなくて、ミルクで乾杯というのも変わっている。確かにこの土地の牧場でとれるミルクは地元では好んで飲まれていた。地域の学校給食やレストランでも積極的に使われている、地元の人には馴染み深い味である。

司会者が号令をかける。

「みなさん、コップを持って立ってください。」

「私たちの掛け声に従って、一緒にカウントダウンしましょう。7月7日午後七時まであと二十秒です！」

え、え、え、もうあと二十秒！！促されるままに立ち上がる参加者たち。

「それじゃあカウントダウンです。」

月が山頂に移動する。

「7、6、5、4、3、…」

月の光が強くなっていく。

「2、1、…」

「かんぱーい！！！！」

三百人にのぼる参加者の声が一斉に響く。

三百人がミルクで乾杯したその瞬間、山の上で輝きを増していた月の光が波のように揺れ、私たちのテ

ーブルだけを包み込む。足元に光の道が伸びる。

頭の中にメッセージが届く。

「あなたが選ぶのよ。」

来た。メッセージだ。迷いはない。私はコップのミルクを飲み干し、光の道に足を踏み出す。自分で未来を選ぶ感覚。光に包まれながら歩く。門が見える。そこをくぐれば、すべてが終わる。そして何かが始まる。そんな気がした。

門をくぐると現実のゲートウェイ函南に戻る。私のあとから、同じテーブルの九人も順々に戻ってくる。全員が決意を決めたような表情をしている。光の波は、対象者だけの特別な体験だった。

イベントはその後、花火と主催者の挨拶で幕を閉じた。

第6章 それぞれの解放

イベントでの出来事はなんだったのだろう。イベントで体験したこと、それまでに私に届いたメッセージのことをぐるぐると考えているうちに、気が付くと家の前だった。

イベントがあつてから、メッセージが届くことは無くなった。いつも通り仕事にも行っているし、子どもたちや家のこともやっている。なにも変わらない。

自分の選んだ人生を生きている感覚。判断するとき、人にどう思われるか、どうあるべきかといった自

分のものではない基準に過度に縛られることはなくなった。自分がどうしたいのか、将来どうありたいのか、その軸がはっきりと見える。

たとえば職場の飲み会の連絡。今までなら、これは出なきゃなあ、などと参加の返事をしては、当日に部長や同僚の愚痴に付き合わされてうんざりしたものだだったが、今は気が乗らなければ不参加で返事をしている。上司にどう思われるか、こんなとき自分のような立場ならどうすべきか、そういうことで参加するかどうかを決めていた自分が、「自分はどうしたいのか」をまず考えること、「くすべき」という考え方を疑うことを、習慣的に行うようになっていた。自分がどうするのが納得がいくのか、それを考えて行動するということだ。そして結果にちゃんと向き合うのだ。

この町には私のお気に入りの場所がある。貴重な仏像を展示している美術館である。私は年に数回は一人でそこを訪れるだった。久しぶりにそこを訪ねたある日、阿弥陀仏の前に立った時だった。不意にその目が私を見つめたような気がした。そして仏像の口元が動く。

「目的の道を見失わず、他のことに惑わされずに生きろ。」

静かな境内に響く声。胸の奥を揺さぶるその声は、アスナたちのものではない。大きな存在、あるいは阿弥陀仏様が語り掛けたのかもしれない。

その声は、今の私を肯定し、背中を押してくれるようだった。

私はこうして、私の人生を取り戻したのだった。

第7章 エピローグ

あれから私は仕事を辞め、独立してゲストハウスを始めた。

大きく儲かるものではないが、やりたいことを追求できる毎日は刺激的でとても楽しかった。学生時代、海外の様々な国でゲストハウスに泊まり、自分でもいつかゲストハウスをやってみたいと兼ねてから思っていた。特にこだわったのは、一階に天井の高い広いカフェスペースを作り、夜はお酒も飲めるダイニングバーにすることだった。

はじめは細々と、地元の人や時々町に来る旅行者を相手に、なんとか続けられている状況だった。それでも私にとって、毎日がとても楽しく、充実していた。

やがて独立してから三十年が経った。昼も夜も地元の人たちと旅人が集うゲストハウスは、にぎやかで温かい憩いの場として人気を博していた。

アスナは、地球で初めて解放作業をしてから三十年を経て、再びワームホールで地球に降り立った。今回は二十歳になる娘を連れていた。地球だけでなく、他の星でも解放作業を経験したが、初めての地球での体験は今も忘れられない。今回の目的は、初めての解放作業の対象者たちがどのように生きているかを確認することだった。

三十年前と同じトウモロコシ畑に降り立ち、娘に語りかける。

「さ、地球に着いたわ。」

「ここが地球？なんていう町なの？」

「日本と言う国の函南という町よ。」

「お母さんはここで解放作業を始めたのね。」

「そうよ。私の初めての解放作業の舞台なの。あの経験は忘れられないわ。この地球旅行ではあなたにも解放作業のときのことを教えてあげたいと思ってるの。それに、三十年が経って、解放作業の対象者が解放されてどんなふうになんか今を生きているかも、一緒に確認しようと思ってるのよ。」

「私はいつからどこで解放作業を始めるのかしら。」

「地球がいいんじゃないかしら。私はこの星が好きよ。」

アスナはゲートウェイ函南の隣の敷地に三十年前にオープンしたというゲストハウスの一階のバーに向かった。

「いらっしやいませ。二名様ですか？」

「はい。私たち二人です。」

「宿泊ですか？お食事ですか？」

二人は図らずもアスナの三十年前の解放作業の対象者である「私」にテーブルに案内され、地域で自慢の「ミルク」をサービスとして振舞われたのだった。

(完)

2025^{ねん}年7^{がつ}月の創造的破壊^{そうぞうてきはかい}—神波^{こうは}の門^{もん}

2025 年 10 月 25 日 発行

著者 はた

令和 7 年度 函南町立図書館 8 月～11 月 Y A 展示・企画冊子
編集・製本・発行 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）
電話番号 055-979-8700
住所 419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

2025年6月、古い予
言が囁かれる中、日々の暮
らしに違和感を覚えた主人
公は、少年時代の冒険心を
思い出す。不思議なメッセ
ージに導かれ、光のゲート
ウェイを通じて「べき思
考」から解放される主人
公。

